無力次第也

――『看聞日記』に見る伏見宮貞成の生きかた――

位藤邦生

はじめに

本稿は、『看聞日記』に見られる「無力」の文字に注目して、筆者伏見宮貞成（さだなさ）の感じかた生きかたの特徴を閲し、さらには『看聞日記』の文学作品としての特質についても若干の考察を加えんとする試みである。『看聞日記』において「無力」の文字に注目すべき所以は、すでに別稿で述べておいたので説明は省略するが、これからの記述に前稿というときはもっぱらその小論をさしていると御承知おきいただきたい。（注1）本稿では主として『看聞日記』永享期における「無力」の用例によりながら、右に述べた目的に沿って私の考えるところを明らかにしてゆきたい。

一

はじめに永享期に見られる「無力」の用例を年次別に数で示しておけば、次のようになっている。

永享二年―3、三年―3、四年―9、五年―9、六年―7、八年―0、九年―7、十年―2

永享四、五、六年の用例数が他の年に比べて多いのは注意すべき点で、そこにはいくつかの理由が想定できるが、なに偶然そうなっているのだという意見に対してこちらの意見を承認させるほどのそれが理由であるかどうかはわからない。但しそれを承知で書いてみると次の二つのことに集約されると思うから、まずそれを明らかにしておいてのちに実際の例にあたって説明を加えたい。一つは将軍足利義教の存在である。この個性的な専制政治家の存在が貞成の精神及び行動に与えた影響、というよりもむしろ圧迫は実に大きく、貞成は彼との緊張関係の中でしばしば「無力」のおもいをもった。二つめは、後小松上皇の存在である。永享期にはいって貞成は太上天皇号を獲得する望みをもったが、それの実現を阻む（と貞成には思われた）人物に後小松上皇があった。上皇との精神的な軋轢の中で貞成はいくどか「無力」の感慨を漏らしている。足利義教との関係についてはのちに述べることにして、後小松上皇との関係で発せられた「無力」の用例をはじめに吟味しておこう。

※　※　※

永享年間といえば貞成は今上（後花園天皇）の実父としての重み

を次第に備えてきており、世に知られようという望みなら一応叶えられていたというべきであろう。応永年間にしばしば見られた貧困からくる「無力」のおもいも影をひそめ、伏見宮家の地位は以前に比べて格段に上昇していた。ところが実子彦仁の践祚をもって崇光院流の再興と考えた貞成と後小松上皇との間には意見の深い齟齬があり、貞成にとって上皇はいわば目の上の瘤であった。貞成が太上天皇への願望をもった頃から軋轢は次第に大きくなってそれは貞成の著『椿葉記』に知られるところであるが、ふたりの対立はすでに早く永享二年（一四三〇）の記事にも見えている。

この年の十月二十六日貞成は天皇の行幸を見物した。前もって将軍義教から許可を得ておいたのである。「行幸拝見歓悦之余心中詠之」「御幸する豊の御秋を我君の代にあひみんとおもひやはせし」我が子の晴姿を見て貞成は大いに得意であった。しかし彼はどうも少し有頂天になりすぎていたようで、面倒なことはその日のうちにも起こった。

抑今朝仙洞へ献状。見物事申入。御返事自是云々。出京事兼日雖可申入有存旨。今日出京以後申入時宜不快歟。如案無御返事。（永享三年十月二十六日）

上皇を無視した貞成の振舞に後小松院がつむじを曲げたのである。あわてた貞成は次の日家臣庭田重有に手紙をもたせてもう一度仙洞の意向を探らせてみた。

見物並参事ハ是非無被仰旨。時宜不快無力事也。仙洞御見物事室町殿不被申沙汰無念ニ被思食之処。予見物事内々自彼申沙汰之間。雖以遅時宜之条存内之事也。（永享二年十月二十七日）

将軍が味方になっているのだから内心安心はしていたが、なんといっても大恩ある上皇の立腹である。貞成はなすすべがなく、自分の「無力」を甘受した。

次に、上皇との件に関しては途中のくさぐさの記事をはぶき、私は永享五年十月上皇の死去に際しての貞成の感想を中心に考察を進めたい。上皇の死をきいて彼は「而忽御子孫断絶。不思儀事也。天下諒闇事未定云々」と書いた。上皇の猶子として践祚した後花園天皇をあくまでもその流としては認めず、崇光院流の再興と考える年来の彼の主張がここにもあらわれているのである。そうして、こんなふうに考える貞成には諒闇の件が甚だ重大な関心事となった。彼が諒闇を喜ぶはずはない。いくつかの資料から推測すると伏見宮家に好意を寄せていた義教はこの件に関して終始曖昧な態度をとっていたらしいが、三宝院満済、一条兼良等故院に心を寄せていた人々の主張が結局は通り、諒闇が決定した。貞成は次のように書いている。

諒闇事以伊勢祭主被下御孔子之処。可為諒闇云々。仍諒闇治定也。存内事雖非可驚無力次第也。（永享五年十月二十五日）

諒闇のあるなしは後花園天皇の皇統上の位置に係わる重大問題であったから、貞成にしてみればこのたびの諒闇決定は崇光院流再興という彼の主張が皆によって無視されたように感じられたのである。それ故の「無力次第」の感想であった。彼がこの件にひどくこだわっていたことは、それから約一ケ月後の記事によっても知りうる。

抑諒闇事。室町殿御意ハ不可有其儀之由被経御沙汰之処。前摂政。故院。近臣共評定。旧院御子孫不断絶之様相計。以三宝院猶可為諒闇之由申。（中略）諒闇ニ治定云々。無力次第也。室町殿御意之融。当方御晶眉喜悦不少。（永享五年十一月二十三

日）

義教の意見についての貞成の解釈には我田引水の気味があるが、それはともかく諒闇はすでに決定したので貞成にとっては結句「無力次第」なのであった。黒衣の宰相三宝院満済ははじめから貞成に対して必ずしも好意をもっておらず、しかもその人が当時将軍を動かしうる力をもった恐らくはただひとりの人物であったのであるから、貞成はここでも「無力」であった。

さて、以上のように貞成と上皇との間には皇統の解釈にも絡んで複雑な問題があり、それだけに貞成は自分の「無力」をおもいしる機会が多かったのだといえる。永享四年五年の「無力」の多出はそのことと関係している。

二

ところで、私はこれまでの叙述で「無力」の文字をいう場合、あたかもこれが熟語であるかのようにとり扱い、「無力」は「ムリョク」と訓むべきであるかのような印象を読者に与えてきたと思う。実際、多くの場合漢文日記には訓点は付されていないから、当時どの文字をどのように訓んでいたかを定めることは思いのほかに困難であって、和化漢文を資料とする国語史研究、中でも語詞研究になかなかはかがゆかないのも、これは素人考えだがそこらに理由の一つがありそうな気がしている。が、それはそれとして当面の「無力」についていえば、『看聞日記』では「無力」は「チカラナシ」と訓まれていたろうと考えられ、私がそう考える根拠を以下に述べていくことにする。はじめに「無力」の全用例一〇七の内文章中での使われざまをパターンによって分類してみると次の四つにわけられるので、それぞれの例文を一つだけあげ、用例数を括弧内に示しておく。

①枉而所望之由懇切申間。無力領状了。（四十六例）
②且寄縁歟得度時剋到来無力次第也。（三十一例）
③御領内事不仰成敗仙洞へ可訴申之条無力事也。（二十九例）
④然而勅命無力之間。被領状申。（一例）

つまりはこれらを「無力の次第」「無力の事」などと訓んだのかそれとも「力無き次第」「力無き事」と訓んだのかという点を知りたいのであるが、①のタイプについて付言しておけば「無力」は文中にのみ使われていて文末には来ない点に注意しておきたい。また④については、一体『看聞日記』にあって「之」が常に不読の文字なのかどうかが私にはわからず、従ってこれを訓みを明らめる徴証としては使用しえない。

ここで次の文章を見ていただきたい。

左府もさまて衰老の年令にても候はぬ程に、あすを期するやうにて由断仕候ところに、ふとかやうになられて候程に、つゐに伝受仕らす候、後悔もとかく申はかりなく、口惜く歎入て候、かやうに申入候もあまりに面目なく存候へとも、ありのまゝの儀ちからなき次第にて候、（応永二十八年七月五日書状案）

これは貞成が仙洞（後小松院）に宛てた書状（案）であって、内容については『看聞日記』七月四日の記事その他によって明らかにしうる。それによれば四日後小松院より貞成へ勅書が下され、四絃灌頂の件に関して勅問があった。というのは、貞成はかねて故栄仁親王から四絃の秘曲を伝授されていた今出川公行についてこれを相伝したいと希望していたのだが、それをまだ果たさぬうちに公行が

六月十三日死去したのである。「伏見宮御記録」によると、貞成は応永十八年（一四一一）に秘曲四曲のうち「楊真操」だけを伝授されているが、この公行の死により結局ほかの秘曲は伝受を受けぬまに終わった。従って右の書状はその間の経緯を伝える消息であると知られる。ところが、この書状案が書かれた前日の七月四日『看聞日記』の記事中に我々はこれとほぼ同内容を示す文章を見い出しうるので、次にはそれをあげてみよう。

予灌頂事不遂其節。至三曲令伝受之由ありのまゝに申入。雖無面目無力次第也。（応永二十八年七月四日）

今両者の傍線部分を比較すれば、「無力次第」は書き手の意識の中では「力無き次第」と訓まれていたのではないかと推測されよう。さらに私は貞成の著にかかる『椿葉記』の中からも二つの例をあげておくことにする。

兄弟の御中にも御位のあらそひは昔よりある事なれは、力なき事也。

しかれとも親王登極の御先途を遂られねは、力なき次第なり。

以上にあげたところから、私は『看聞日記』では「無力」は「力無し」と訓むべきだと考えておいてよいのではなかろうかと思うが、探索の手は今のところここまでである。

現代の我々には「無力」と「力無し」とは言葉が与える感じがたしかに違う。そしてそれは単なる語感の違いというにとどまらず、言葉が我々に与える心的影響（ショック）の違いであるかも知れない。少なくとも私には「無力」の方が強く響く。正直に言えば私は『看聞日記』を読みながら「無力」を「ムリョク」と音読していて、その言葉とその使われざまが与えるショックから、変な言い方だが、文学的感動を呼び起こされていたといえる。前稿及び本稿において「無力」を『看聞日記』理解のキー・ワードの一つとして用いたのもそれが理由であった。が、「無力」が「力無し」であるにしてもそれが伏見宮貞成を理解するうえで重要な言葉であることはかわらない。ことにつけ折に触れて自分を「力無い」存在と感じていたのが貞成の生きかたの一つの特徴であったことは否めないのであって、これを前稿で私は「無力の文字は、つまり、貞成の個性の表現なのであった」というふうに書いた。語学の問題に限れば『看聞日記』の「無力」は「力無し」であるかも知れぬが、これからの叙述にあっても私が「無力」を「無力」として使うことをお許しいただきたいと思う。貞成とその作品とを理解し説明するための私自身の術語（ターム）であるというふうに今は考えておきたい。

三

ここで多少わき道にはいることになるが、私は『春のみやま路』（飛鳥井雅有）の中から「ちからなし」の用例を拾いそれについていささかの考察を加えてみたい。『看聞日記』で「無力」を「力無し」と訓んだであろうことを示す一つの便宜ではあるが、それだけではなく雅有の「ちからなし」の特徴についても多少触れるつもりである。前稿ですでに述べたように一口に「無力」といってもそのあらわれ方は使う人によってそれぞれに違っており、各人がその言葉に托したであろう感懐も決して一様ではなかった。たとえば『看聞日記』と『満済准后日記』とでは「無力」の文字の使用数が大きく違っているのは敢えて不思議でないとしても、それぞれの筆者が「無力」の言葉に含ませたニュアンスは歴然と違っていた。それは前稿で指摘したとおりである。そしてこれもすでに述べたように、

応永期にあっては「窮困のうれへ」からくる「無力」ないし「無念」のおもいが貞成には殊に顕著であったが、これとても貞成という個人の感じ方と切り離しては考えられぬので、彼の言葉から伏見宮家が他の公卿の家と比べて極端に貧しかったというふうに単純に考えると間違いをおかすことになろう。たとえば貞成は次のようにいう。

抑故宰相入道明日廿五年忌仏事計会之由。源宰相申。不能助成無念也。茶十。せめてもの芳志比興也。（応永三十一年二月十四日）

ところが同じような、否それ以上の貧しさの中で中原康富の場合はこんなふうに表現する。

雨、今日論語雅也、講釈之日也、茅屋雨漏之間、向三福寺令談之、長老並源秀房、大館礼部、九郎等令列之、其後有一盞、（『康富記』文安五年七月十七日）

雨もりがし自分の屋敷では論語の講釈ができない状況も康富にはそれほど苦にはならなかったらしく、少なくとも日記の中で泣きごとをもらしてはいない。これなど貞成なら「無念」とも「無力」とも言いそうな状況ではあるまいか。「大きな期待をはじめから持たなければ、現実に裏切られることもなかろう。貞成の「無力」は、多くの場合、彼の願望と現実生活との懸隔の深さから生まれていたと言える」と私は書いたが、右の例の場合にもそっくりそのことがいえるであろう。

さてそこで『春のみやま路』である。続群書類従所収のこの日記は弘安三年一年間の記事を含み、雅有四十歳のときの作品であるが、「ちからなし」の用例は全部で七例を数えうる。日記全体の量から考えればこれは多い方であるといえよう。もっともこの日記、二年ほど前に長男雅顕を失った悲しみの色がまだ濃く揺曳していて、「おぼつかなし」だの「あひなし」「うらめし」だののネガティヴな響きをもつ言葉が日記全体の色あいを染めているから、そうした雰囲気の中での「ちからなし」の使用だと承知しておいた方がよい。たとえば、次のような例がある。

殿上の淵酔みんとていでたつところに。おもひのほかなる客人どもあまたまうできつゝ。さけのみなどして。とみにもかへらねば。心つきなけれども。うちすてゝたゝむこともわりなくて。よもふけぬれば。ちからなくてみずなりぬ。（弘安三年正月三日）

ここでは「ちからなくて」という表現に深刻なおもむきは見えず、むしろなげやりな感じを受けよう。これは『春のみやま路』全体がもつ雰囲気ともかようもので、「いはゞよきおとこのなやめる所あるにゝた」風情ともいうべきものが全体の調子にあらわれている。つづいてもう一つ例をあげておく。

御所のやのひろひさしにてさけのみてかへるに。猶あかず。いざやいづくにまれゆきてあそばんとて。四条の少将しれるけいせいのもとへゆくに。さしあふとありてむなしく帰るに。さらばとて人〳〵をしいれば。ちからなくてまたゑいすゝむ。（弘安三年三月十三日）

これがつまり雅有の「無力」である。ムリョクではなくあくまでも「ちからなし」でなければならず、貞成の使いざまとの違いもあきらかであろう。

ところで、この『春のみやま路』は仮名文で書かれてはいるもの

のその文章は漢文体の日記を訓み下した感じが強く、仮名文に変体漢文の語法が生きているその点では『土左日記』にかようところがある。たとえば、

廿七日。雨ふる。みの時にまづ内裏へまいりぬ。上卿左府すでに参あるとて。奉行いそぎはべれば。神祇官へまいりぬ。いまだ人もなし。（弘安三年二月二十七日）

というふうな文章は漢文日記の文章をそのまま訓み下したようなおもむきであって、さきに見たのはそのような文章の中での「ちからなし」という用語であったことに注意しておきたい。『看聞日記』の「無力」は恐らく「力無し」と訓んだであろうとする消極的な根拠はここにもあるのである。

〔付記・中世も末期になると熟語としての「無力」は当然あったので、『日葡辞書』には「ブリョク」として登録され、「無力千万也」と意味上では『看聞日記』と同様の使われざまが記されている。また『饅頭屋本節用集』でも「無道（ブダウ）」の並びに「力（リョク）」とありブリョクの存在を知りうる。が、いずれにしても『看聞日記』で「無力」をどう訓んだかのきめてにはならず、残念ながら私の追求は尻きれとんぼである。〕

四

ところで少々先きばしった言い方になるが、私は「力無し」は本来男性の表現であり、それが和化漢文の伝統に沿って貞成の日記にまでも流れ込んできたのだと考えている。単純に力が無いという意味での「無力」の使い方は勿論中国から伝わったもので、大漢和辞典などを見ればわかることだが、「ちからなし」といわないまでも「力」という言葉そのものが女性の使い方としては限られていたようなので、次にはそれについて簡単に述べておきたい。

まず『かげろふ日記』であるが、これには「ちからなし」の一例をみる。作者が道綱を連れて西山に籠っていたとき上京してきた父倫寧が彼女を迎えにくる。言葉を尽して説得されて結局は帰山することになるのだが、そのとき「いとちからなくて、思ひわづらひぬ」というのが彼女の述懐であった。このほかには「力」の語はない。『紫式部日記』『和泉式部日記』には「ちからなし」の例はなく「ちから」の語そのものも見えない。次に『更級日記』であるが、「力」の語一例を見、その使われ様は次のようになっている。

清水にねむごろにまゐりつかうまつらましかば、前の世にその御寺に仏念じ申しけむ力に、おのづからようもやあらまし。

作者が夢に清水の礼堂で別当とおぼしき人に会い、さきの世での自分の姿を告げられての感慨であるが、ここには注意すべきことがある。それはここにいう力が「効力」とか「ききめ」とかの意味あいになっている点であって、『看聞日記』や『春のみやま路』における力の用法とは異なっている。そしてこれは女流作家の作品に見られる力の用法の特徴であると思われる。たとえば『源氏物語』には力及びそれを含むことばが十例見られるのだが、そのうち丁度半数の五例は「多く立てつる、願の力なるべし」「忌むことの力もや」「祈り・願などの力にや」「遊び侍りし力にや」「念じ侍りつる力」と、みな同じ意味あいで用いられている。他の五例のうち帚木の巻に出る例は「力いり」という熟語であり、まずこれは考察の対象からはずしておいて、残りの四例をみると、二例は外的な要因としての勢力資力または資格の意味で使われており、『伊勢物語』に「女

も卑しければ、すまふ力なし」とあるのとほぼ同じ用法である。そこで、注意すべきは二例だけとなる。一つは若菜の巻（下）に出る源氏の言葉で、「女子を生ほし立てんことよ、いと、難かるべきわざなりけり。（中略）生ひ立たむ程の心づかひは、猶、力いるべかめり」というのであって、「力なし」の用例ではない。またこの「力」の意味についても格別重い意味があるわけではなく、あれこれいいつらうには及ぶまい。

残るのは行幸の巻に出る源氏の言葉である。源氏が末摘花のまずい歌及びその手跡をみて次のようにいう。

この歌、よみつらむほどこそ。まして今は、力なくて、ところせかりけむ。

結局これが『源氏物語』にある「ちからなし」の唯一の例である。明石入道が自分を「力およばぬ身」と述懐したのが、これは資力の意味だとしてもわずかに似ている用法だといえるかも知れない。

さて、このように見てきたうえで、いささか性急に結論を出すようであるが、私は「力なし」という感懐、感じかたは、『かげろふ日記』の一例のように多少の例外を許すとしても、おおかたは男性の感慨、感じかたであったと思う。『かげろふ日記』の一例を除いては女流日記に「力なし」の用例が見えないのもその一つの証拠であるし、『源氏物語』の中でも「力なし」「力及ばぬ」はそれぞれ男性がその判断の主体であった。ここで「無力」なる言葉そのものについて考えてみると問題はいっそうはっきりとするはずで、「力」が「ない」状態がすなわち「無力」であると一応規定しておこう。権力や財力による力もあろうし、自分の体力や意志力への信頼という力もあろうが、いずれにせよそれがどのような力であれ自分の中になんらかの力が備わっていたところへ、外部ないしは自分のうちに別の力の存在を感じたとする。そして、後者が前者を圧迫してやがて前者の存在を危くするに至ったとき、「力無し」の感慨は生じるのである。ここでたとえば31頁であげた「無力」の文字を含む文章をもう一度見ていただければ、「無力」をいう場合のその「力」がなんであったかについては種々様々の場合があって、とても一様に片づけるわけにはいかないと知られるであろう。が、それにしても、私がさきに述べた「無力」の感懐を生ぜしめる精神構造は基本的にはかわるまい。そしてその「無力」のおもいが、男性の日記にのみ見えて女性の日記にあらわれなかったことは、当時の男女の精神構造の違いを考えるとき興味深い問題を提起しそうである。紙数の関係もあって詳しくは触れえないが、女性が自分らのもちぶんというか存在の基本的な姿を「力」であるととらえていたとはみなしがたく、たとえば窮乏の中にあって男性なら「力無し」と感じたところを、彼女らは「わりなし」とか「わびし」とかというふうに感じていた。そして、そのような精神構造の違いがそれぞれ結果的にはどのような文学を産みだしたかという方向に目をむければ、隠者の文学がそれのどちらをより多く継承していたかなど、考察すべき点は次第に拡大してゆく。

これは当然両性の思考形式の違いといった問題にもつながり、社会学的な視点からの考察も必要となろう。が、ここではそういった問題点の指摘にのみとどめておくとして、このようにも書き進んできたわけは、実は『春のみやま路』や『看聞日記』など男性の日記にあらわれる「無力」の文字に注目する所以の枠をもう一つ広げるこ

とにあった。私はかつて漢文日記の文学性について論じ、漢文日記が社会の匂いを濃厚にもっている点に注目しつつこれを「男性的な文学といってもよかろう」と述べたのであるが、(注2)「無力」についても同じことがいえる。「無力」の感慨は一般的にいって敗北の意識であり、読者に一見めもしい印象を与えるかも知れないが、自分のうちにある力がなにものかと対立して砕ける内面のドラマはそれなりに壮烈なのであって、多くは社会的な存在であるところのその対立するなにものかは、人の生の厳しさを我々に見せつけるのである。そして、これは確かに文学を支えるモメントの一つであろうと思われる。そこで、私は文学作品を読みとる視座をここに据えることにして以下にまた『看聞日記』の「無力」の様相を見てゆくことにしたい。

五

室町幕府第六代将軍足利義教は応永三十五年（正長元年）三月に将軍職を襲うたが、その後約五ヶ月ほどして伏見宮貞成の長子彦仁が践祚した。のちの後花園天皇である。後小松上皇はまだ存命で彦仁が践祚したのも上皇の猶子という形であったが、この践祚によって貞成の対社会的な立場が飛躍的に上昇したのは確かであって、事実将軍義教はそれ以後伏見宮家に対して物心両面にわたる厚い庇護を加えるようになった。もっとも物心両面の援助とはいうものの後者に限ってみれば貞成の側でそれをそのように受けとめていたかどうかには問題があり、そこに権力者との交際の危うさが窺われて興味深い。また確かに義教の伏見宮家支援には年来の課題であった厄介な皇統問題をうまくおさめたいとする政治的な配慮が強く働いていたので、彼の宮家への肩いれを単なる好意からとのみ考えるわけにはいかない。従って公武の頂上に並び立った貞成と足利義教の交渉は、利害関係と両者の私的なおもわくとが複雑に絡みあってときに奇怪な相貌を呈した。貞成の継母東御方（三条実継の女）を媒介としての両者の間係についてはかつて述べたことがあるので、（注3）ここでは別の出来事をあげて考察してみたい。ただし、公武の頂上と私はさきに言ったのであったが、公と武との実力の違いはすでに覆いがたく、権力も財力も武家の側において圧倒的であったことを蛇足ながら確認しておきたい。しかも義教という将軍は極端な専制政治を志向していたから、彼の野望に対して軋轢を起こす事象があればきわめて峻厳にこれに対し、冷酷無惨な行動もあえてした。いわゆる「万人恐怖」の政治姿勢であって、我々はその点にも留意しておかねばならぬ。こうした状況下での貞成と義教の交渉であった。

※　※　※

上臈事西雲庵ニ返事申。可被参事不可有子細之由令申。主ハ旁難儀周章無極。然而難故障之間無力先領状申。（永享四年五月三月）

右の文章についての詳しい事情を説明する前に文中に登場している二人の人物について簡単に説明しておこう。上臈は貞成の兄葆光院（治仁）の陪妾であった。だから今でいえば未亡人である。彼女には女子が三人あったが、そのうち二人はそれぞれ鳴瀧殿岡殿と呼ばれすでにしかるべき寺院に入室していた。応永二十四年（一四一七）葆光院が急死して七日後に生まれた三番めの女子ははい御所と呼ばれ、これまで貞成の許で養われていた。この娘は翌永享五年

（一四三三）十六歳で坂本智恩寺に入院する。さて、彼女ら三人の母である上臈は治仁の死後ずっと貞成の御所で暮していた。故栄仁の愛妾東御方や廊御方それに貞成の正妻南御方と一緒の生活では、彼女にとっても色々と気苦労が多く時には辛いこともある生活であったろうが、彼女は自分の三人の子供を護ってつつましく暮していた。『看聞日記』で見る限り、彼女はどこといって特徴のないなにごとにも控えめな女性であったようである。しかし貞成の方でも彼女を決して疎略に扱っていたわけではなく、いってみれば治仁の急死のおかげで家督を相続できたわけであるから、その未亡人の上臈に対しても一貫して丁重な態度をとっていた。勿論御所中の花見など色々な催しには彼女も他の女中に同伴した。一応これだけ説明しておく。これが右の文中の「上臈」である。

一方の西雲庵。彼女は本名を見怡という。従一位万里小路仲房卿の娘であって『尊卑分脉』には「黒比丘尼也　入江殿交衆　号西雲庵」と記されている。仲房の娘であるから当時武家伝奏の役を勤めていた万里小路時房は彼女の甥にあたる。当時彼女は入江殿では貞成の娘性恵の保護者的な役割を果していたのであるが、いうなれば女傑といってもよいような人物であった。その点に関してなによりも重要なのは、彼女が将軍義教に対してはっきりとものの言える数少ない人物のうちのひとりであったということだ。どうして彼女がそのような実力を身につけたか今私は知らない。或いはさきに義持の娘が入江殿に入室していた時分室町殿と深い関係をもったのではないかとも考えられるが、詳しい事情はわからない。義教の妻尹子とも親しく、『建内記』によると永享十一年尹子が義教の名代として見怡の病気を見舞っている。ともかく、伏見宮家と室町殿の間の連絡は、当時もっぱらこの西雲庵を通して行なわれていたものと思ってよい。ということは伏見宮家と室町殿との間の重要なパイプとして入江殿の存在があったということだが、入江殿についてはごく簡単にだけ述べておく。

光厳院の皇女光子内親王（一品入江宮）の開山とも後光厳院の皇女見子内親王（入江内親王）の開山とも伝えるこの寺は、正式の寺名を三時智恩寺といい、当時は伏見宮家・足利将軍家から代々の方丈をむかえていた。従って将軍家よりの庇護が格別に厚く「寺中福貴之式如大名」という状態であった。ところがさきにちょっと触れたように貞成の長女性恵が応永三十一年（一四二四）以来この入江殿に入室しており、しかも永享五年になると義教の娘（聖智）も性恵の弟子として入寺することになったのであるから、伏見宮家と足利将軍家は双方ともにこの寺を重んじ、且つ利用していた。ともかく、以上で文中二人の人物の説明をおわる。引用した本文に戻ろう。

※　※　※

実は先に引用した三日の記事は、その前日の記事を知らぬことには理解できぬので、順序が逆になったが次には五月二日の記事を引いておく。

御乳人帰参西雲庵被申。室町殿侍女両人懐妊。今日御産也。誕生御子檉拘之上臈被尋。此御所上臈可被参事如何。御意無子細者可被召之由。内々可尋申云々。不思寄之儀令迷惑。云其身之進退云外聞実儀旁以周章也。雖然当世之儀難故障申事歟。（永享四年五月二日）

御乳人というのは貞成の長男彦仁（後花園天皇）の乳人で、前日

その乳人が伺候したとき西雲庵から聞いてきた話である。近々相つづいて誕生するはずの室町殿の御子の世話役の一人に、貞成の御所から例の「上臈」を差し出されたいという。（「楷拘」とは何であるか。よくわからない。）「御意無子細者」というのが義教側の一見へりくだった条件であった。しかし、この時代に誰が、子細ある、それは困ると義教に対して言えたであろうか。これは確かに命令であった。しかも思いもかけなかった命令である。貞成は迷惑し且つあわてた。

私がここで事々しく説明するには及ぶまい。長年一つ屋根の下に暮してきた嫂の上臈である。できれば室町殿へなど差し出したくはなかった筈だ。けれども、ここでも貞成はいう。「雖然当世之儀難故障申事歟。」ここから「無力」の思いまでどれほどの距離があろう。先に引いた翌三日の記事をここでもう一度見てほしい。「然而難故障之間無力」なのである。「雖然」と言い「然而」という。この屈折の言葉に籠められた苦悩こそ、権力者義教の前に立たされた貞成の運命なのであった。それから六日おいた五月九日、我々は次の記事を見る。

自入江殿有御文。上臈今日吉日之間可被参之由奉。明日之由存之処。仰天毎事不具。雖左道之式先入江殿まて被参。纏頭無極。上臈ハ葆光院仕女。鳴瀧殿。岡殿。姫宮等之御母儀也。「俗性執杓一条一族本証院云々」旁以難儀外聞実儀雖不可然。近日之儀不及故障。無力次第也。且其身之幸歟。是非迷惑而已。

（永享四年五月九日）

思っていたのよりも一日早く出仕せよとの命令があって大いにあわてた。それはまだ仕度ができていないから、と貞成は言うが、一日でも出発を延ばしたいのが人情なのである。左道（＝不都合）の式であったが、上臈は仕方なく先ずは入江殿まで出かけた。ここでもまた「無力次第」と貞成はひきさがる。「外聞実儀雖不可然」「近日之儀不及故障」だからである。この日の記事の本文の上には、細字による頭書として次の文章が書かれている。

上臈去応永十八年正月初参。至今年廿二年祇候。於于今被退出之間。多年之余波不少。主も落涙之外無他。

これが本音であろう。応永十八年（一四一一）といえば、貞成が四十歳でやっと元服伏見殿へ帰って来た年である。それだけに共通の思い出も多く別れる寂しさは一入であったろう。義教に認められた彼女の運命を「且其身之幸歟」と思ってみても、真底貞成がそんなふうに信じていたとは到底思われない。その証拠に、すぐにまた彼は「是非迷惑而已」と記すのである。

上臈のその後について語るべきことはいくつかあるが、残念ながらすべてを端折り、最後に一つだけ記事を引いておく。

抑今夜姫君「宮内卿腹」自産所「畠山右馬助宿所」御所へ被入申。「是之」上臈御共参。「棟立輿。姫君同輿中間直垂。二十人」刷行粧被参。上臈之式活て生を如易不思儀之果報也。不可説々々。（永享四年六月二十五日）

義教の姫のお伴をして、よそめには上臈は時めいて見える。けれども「果報也」というのは果して貞成の本心であろうか。彼女の今の境遇、事情を知らぬ人にはなるほど果報とも見えるであろう。が、自分にだけはわかっている。なにがまことの果報でなどあるものか。……それが彼の「不可説々々」なのであろう。

将軍義教の力はいつもこんな具合で貞成に迫り、貞成はことごと

に「無力」を意識せずにはいられなかった。『看聞日記』に見られる永享期の「無力」は、その殆んどが義教との関係で語られている。

六

さて、私は永享期にみられる「無力」のあらわれの特徴を貞成の嫂である上臈の室町殿出仕の件に関して見てきたが、ひとつひとつの「無力」の用例について述べる余裕はすでにない。これまでいくつかの例にあたって見たように貞成は彼の人生のうちにしばしば「無力」の思いを味わい、「無念」の感慨をもたねばならなかったが、彼が太上天皇号の獲得に意欲を燃やした時期とほぼ重なりあっていた足利義教との交渉においては、殊に自分の「無力」をおもい知らされる場合が多く、屈辱のおもいは折につけて彼のものであった。『看聞日記』を読んでみると、そうして次第に鬱屈してくる心情を彼は家臣たちとの遊興や和歌連歌作成への情熱にふりかえようとしていたとも思えるのだが、それについては別の機会に述べることにしよう。そのような文芸世界の事柄にまで義教の無言の圧力が働いていたことがやがてわかるはずである。

貞成はしばしばわが身の「無力」を嘆き「無念」のおもいを味わったが、一方からいえば、それは彼が自分の人生に大きな期待をもっていたからであるともいえる。ところが彼の期待はその期待が叶う可能性の枠をときに越えていた。だからこそ彼は「無力」や「無念」のおもいに始終対面しなければならなかったのである。そうしてこのように見れば、期待し、破れ、期待し破れた人生の記録が『看聞日記』であったとも言えるのであって、『看聞日記』を稀有の文学として成り立たせたのも或いはこうした生き方を強硬に主張する彼の情念であったかも知れない。精神の圧迫者足利義教が死んだとき、彼自身が念願の太上天皇になったとき、彼は以前のように自分の欲望を主張しなくなった。彼にとって人生への期待そのものが以前ほどの大きな意味をもたなくなったということもできよう。精神の弛緩が文学をどれほど駄目にするか『看聞日記』の終りを見ればはっきりと知られる。義教の死以後の『看聞日記』は、今のところ私には殆んど文学ではないようにさえ思われる。

七

「無力」について長々と述べてきて、語りたいほどのことはすでに語った。が、私は本稿を『看聞日記』嘉吉元年（一四四一）六月の記事を見ることで終えたいと思う。いうまでもなく義教暗殺という事件が中心になる。明らかに一つの時代がおわり歴史の舞台が大きく転換するその時点において、貞成の感想を知りたいのである。我々はここに一つ実に印象的な「無力」の文字を見ることができる筈で、それをもって本稿のとじめとしたい。

廿四日。雨降。赤松公方入申。有猿楽云々。及晩屋形喧嘩出来云々。騒動是非未聞之処。三条手負て帰。公方御事ハ実説不分明。赤松家炎上。武士東西馳行。猥雑無言計。至夜「赤松」伊与守屋形炎上。家人共家自焼。公方討申。取御首落下云々。仰天周章中々無是非。内裏人々馳参。以重賢驚申。三条へも遣。只猥雑半死半生之式云々。是ニも人々参集。終夜不寝悄然而已。西室大夫落行云々。（喜吉元年六月二十四日）

こういう具合で事件は起こった。翌日になって貞成が事件の詳細を聞き書きとめた事柄の中から簡単に説明してみよう。その日赤松

満祐の屋敷で猿楽鑑賞の宴があり将軍義教も出席した。一献二献と盃がまわされ猿楽がまさに始められようとした時分、内の方がどよめいた。義教がなにごとかと尋ね、雷鳴でしょうかと供奉の三条実雅が答えたとたん、うしろの障子をひきあけて武士数人がおどりかかり義教を殺した。祝宴の座は一瞬のうちに修羅の地獄に変容したのである。この様子を『看聞日記』の原文は次のように伝えている。

一献三献猿楽初時分。内方とゝめく。何事そと有御尋。雷鳴歟なと三条被申之処。御後障子引あけて。武士数輩出て則公方討申。三条御前之太刀を取て。「御引出物進太刀也」切払顚倒被切伏。（以下略）

これらの事実がおおむね誤りでないことは『建内記』二十四日の記事によっても知られる。

夜にはいり事件の張本人赤松満祐は自分の屋形に火をかけ一族を率いて領国に下った。世に「嘉吉の乱」といわれるこの事件は、下剋上の風潮を如実に示すものであり、歴史家によってすでに多くの説明がなされているから、原因その他については私はここでは語らない。当面の興味はこの事件に関する貞成の反応である。

管領細河讃州。一色五郎。赤松伊豆等ハ逃走。其外人々右往左往逃散。於御前無腹切人。赤松落行。追懸無討人。未練無謂量。諸大名同心歟。不得其意事也。所詮赤松可被討御企露顕之間。遮而討申云々。自業自得果無力事歟。将軍如此犬死。古来不聞其例。御死骸ハ焼跡より瑞蔵主求出て。等持院へ奉渡。御首ハ摂津国中島ニ御座之由。赤松注進。（嘉吉元年六月二十五日）

将軍の御所であとを追って切腹する人はいない。赤松は領国へ落ち下って行ったが、追いかけて討とうとするも人もない。赤松への未練はいわれのないことだ。諸大名は赤松と心を通じているのではあるまいか。その真意はわからない。つまるところ、義教が赤松を討とうとした企みが露顕したために、赤松が自分の方から先制攻撃をしただけの話だ。義教の自業自得のはてであり、無力の事ではないか。将軍がこんなふうに犬死するなんて、古来その例を聞いたこともない。死骸は焼け跡から瑞蔵主が探し出して等持院に渡した。首は、摂津の中島にあるよしを赤松側が知らせてきた。……

貞成の筆はぞっとするほどに冷たい。今まで抑圧されてきた恨みつらみが、一つのセンテンスをつづるごとに少しずつあふれてきているかのように見える。彼は義教の死に際して不便だとか悲しむべきだとかは一言も漏らさず、「自業自得」と言いきっている。つい先日まで将軍からの贈り物に狂喜し、義教の華やかな行動を書きとめていたこの人の表情は、もはやどこにも見い出せない。だが、この変貌を誰も不思議とはみないであろう。義教によって押しこめられ矯められた精神の自由が、今こんな形で戻ってこようとしていたのである。

右の文章の中にあった「無力」の文字に改めて注目しておきたい。自分がいくども突き落とされた「無力」の地獄に、今その男が落ちて行った。それも死というきわだった形をとって。貞成の「無力」がこれまで圧倒的に彼自身の感懐であったことをもう一度思い出していただきたい。その彼が、ここでは自分の「無力」をいわず義教の「無力」を嘲笑っている。

「無力」の地獄をくぐりながらここまで生きてきた伏見宮貞成

の、これは復讐ではなかったろうか。私にはどうもそのように思われる。しかし、復讐の響きのなんとむなしいこと、それは奇しくも文学としての『看聞日記』の閉じめでもあったのである。

（注1）「伏見宮貞成の生きかた――『看聞日記』に見られる「無力」について・応永期の場合――」（「中世文芸五十号記念論集」）

（注2）「漢文日記研究序説――文学性発見の視坐――」中世文芸」五十号・前集）

（注3）「伏見宮貞成　対　足利義教――『看聞日記』への文学的アプローチ――」（「広島大学文学部紀要」第三十二巻）

――広島大学助手――

会員近著紹介

「近世・近代のことばと文学（真下三郎先生退官記念論文集）」

目　次

七　五　調……真下　三郎
芭蕉の視点……今井　文男
式亭三馬の文体――『戯場訓蒙図絵』の場合――……斯林不二彦
敬語表現について――『狂言記』における
サル・サッシャルことばを中心に――……水尾　章曹
「デス」の普及について……山本　正秀
明治開化期文章における
表現形式の新交渉について……木坂　甚
明治二十年代小説文体の一斑―森鴎外を中心に―……磯貝　英夫
明治三十年代の話しことばの教育
――明治三四年（一九〇一）を中心に――……野地　潤家
泉鏡花初期の句読法にみられる
文章の朗読性について……木村　東吉
仮名草子における後生観……鈴木　亨
『好色一代男』の作品構造―「型」の分析による―……浮橋　康彦
『本朝若風俗』の世界
――武士を主とする衆道について――……小野　晋
〃読本〃考……横山　邦治
山陽在江府行状……頼　桃三郎
蘆庵歌論の新検討……中村　幸彦
戯作者から文学者へ……橋本　直久
二葉亭の「俳諧趣味」……寺横　武夫
鴎外『阿部一族』の主資料『阿部茶事談』の性格……藤本千鶴子
「謀叛論」の源流――明治実学の意味――……槇林　滉二
『こころ』論――人物像を通して――……相原　和邦
『下谷叢話』考――鴎外史伝の受容を中心に――……塩崎　文雄
資　料
新編梅翁発句集草稿……米谷　巌
『備後三次俳諧衞足』の解説と翻刻……槙上正孝・米谷巌
草稿本『邯鄲諸国物語』の影印と翻刻……山崎　宏暉
資料翻刻熊本県立図書館本『阿部茶事談』……藤本千鶴子

（昭和四十七年一二月刊。七七二ページ・五、八〇〇円。真下三郎先生退官記念論文集刊行会編、第一学習社発行）